

次郎長開墾

平成十一年四月五日号

次郎長町は富士宮市との境にある標高三百五十メートルほどに位置する地域です。この土地は明治の初めに清水の次郎長が中心となって開墾が始められました。

今回はこの次郎長の開墾にまつわる話を紹介します。

明治七年、清水の次郎長は、山岡鉄舟や静岡県令・大迫貞清おとさださだきよに富士山の裾野の荒地を開墾を勧められました。そこで次郎長は、静岡監獄の江尻（現在の清水市）支所から囚人を

使って開墾を始めました。

実際には

次郎長の

養子と

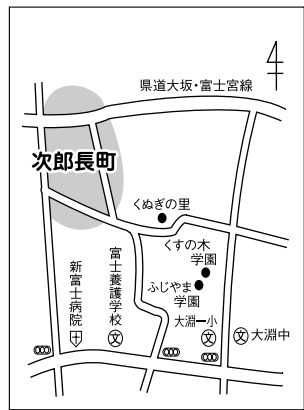
なった

天田五郎あまたの

という人物が開墾の指揮をとりました。荒れた土地を開墾するためには木を切り、雑草と闘い、岩を砕く苦しい労働が続きました。

しかし、土地はやせており、コウゾやミツマタなど紙の原料や農作物をつくるのはとても難しいことでした。そして十年後の明治十七年、約七十六町歩（現在の約七十五ヘクタール）を開墾して中止になり、全員引き揚げてしまいました。

その後、この土地は官有地から民有地として払い下げられ、横浜の貿易商・高島嘉右衛かうえ





- ▲ 次郎長町の中心に祭られている
白髭神社
- ◀ 白髭神社にある
次郎長開墾記念碑

門が四十町歩を譲り受けました。また、山梨県や御殿場、裾野などの近くの村からも、この土地に入植し開墾が再び始められました。こうして、現在の次郎長町の基礎ができたのです。

次郎長町で生まれ育った

平田 實さん（次郎長町）

次郎長に助けられたことが縁で、開墾を手伝ったという「お相撲常」と呼ばれる人がいたそうです。相撲が強かった常にちなんでか、昔は白髭神社の境内に土俵がありました。そこではよく子ども相撲が開かれていましたよ。また、昔はとにかく水には苦労しました。雨水に頼っていたので、水がなくなってしまうときには、井戸のある隣の町まで水をくみに行ったものです。また、土地がやせていたので、馬や牛のふんを肥料に使ったり、肥えた土を持ってきたりして作物を育てました。しかし、限られた作物しかできず、農業をやるのも大変でしたね。